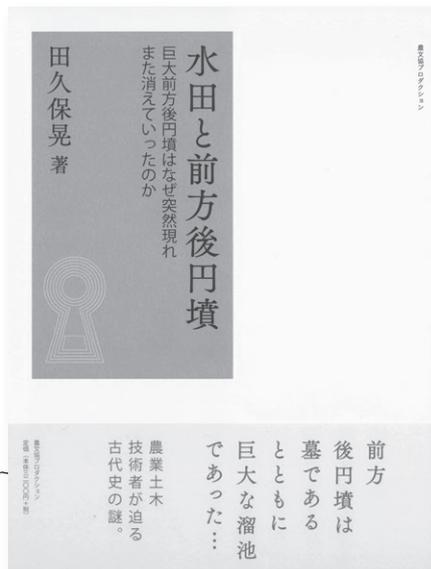


『水田と前方後円墳』

巨大前方後円墳はなぜ突然現れ また消えていったのか

[農文協プロダクション刊]



田久保晃

謎解きの始まり

三世紀、奈良盆地に巨大な墳丘が出現しました。今、その墳丘は、前方後円墳と呼ばれ権力者の墓とされていますが、謎に包まれています。なぜ、その場所に円形と方形からなる形で築かれたのか。その立地がなにゆえ各地に広まったのか。七世紀初頭に、なぜ消滅したのか。そして、三〇〇年以上にわたり巨大な墳丘を築き続けた人びとのモチベーションは、どこから生まれたのか……。

といつても、これら前方後円墳の謎を解くために、この本を書いたわけではありません。人生の大半を占めてきた私の仕事、農業土木とはなにか。それは、家族に誇りをもって話せる仕事だったのか、後輩の技術者に伝える価値がある技術だったのか、社会のためにどんな役割を持っていたのか。その答えを知りたかった。

そのためには、まずこの技術のルーツを探る必要があると思いました。

奈良盆地の東南部を南北に走る「山の辺の道」、そこで出会った巨大前方後円墳・崇神天皇陵の周濠（古墳周囲の濠）の姿は、まさに溜池でした。ちかくの展望台から盆地内を見渡し考えました。私の技術は農業土木。今まで「現在の姿から将来の姿を描く」ことで仕事をしてきた。私の技術でその逆「現在の姿から過去の姿を描く」ことはできないだろうか。

解かなければならなかった 前方後円墳の謎

わが国では、春から秋にかけての降水量だけでは稲作に必要な水は不十分。とりわけ稲の穂が出てくる夏場に日照りが続くと稲は壊滅的な打撃を受けます。そこで、川の水が豊富な時期に、その水を溜池に貯え日照りの時期に水田で使う方法が考え出されました。

この溜池技術は、いつごろ誰が見いだしたのか。それは奈良盆地に誕生したヤマトだと考えるようになりました。ヤマトの技術者は、太古の昔、巨大な湖だった奈良盆地を囲む山地・丘陵の肩部に前方後円墳を築き、その周濠の水で盆地内の緩斜面に拓いた水田を灌漑することを思いついた。もし私がヤマトの技術者ならば、いかにして前方後円墳を築くか。それは前方後円墳の謎を解くことでもありました。

貨幣だった米

弥生時代の末、米は、交易の際の「物品貨幣」として重宝がられていました。米は、美味いだけでなく、その発酵作用により酒・味噌・醤油などを生み出す摩訶不思議なモノでした。

各地の氏族たちは、この米を生み出す溜池技術を受け入れ、ヤマトに忠誠を誓うようになりました。人びとは、豊かになれると周濠を掘り水田を拓き続けました。こうして、米が経済の主役の座を占めるようになり、ヤマトは日本列島の覇権を

握ったわけです。

そのとき、わが国独自の技術・農業土木が誕生したと思います。それまでの稲作は「天水」つまり自然頼りでした。それを、不毛の土地を水田に改変し、貯め込んだ水を水利施設で水田に分配する。自然を都合よく利用する、科学・技術する心が生まれたわけです。また、水利施設を持続的に維持管理し、水田稲作を効率的に行うには、個々の力だけでは困難、集団による管理技術、社会組織のあり方も考えられるようになりました。

日本人の心を創りだした大開田の歴史

私の仕事のルーツを探り得ただけでは、今を生きる私自身のアイデンティティを確認できない。そこで日本の歴史全体を見つめ直そうと考えました。ところが、それが大変だった。それでも、こうであったであろうと思うとことがいくつかありました。

大開田は列島内に高度経済成長をもたらした。古墳時代、氏族たちはクニ興しのために前方後円墳を築き水田を拓き続けた。幕藩体制の時代、米の生産高が年貢の基本だったので、武士も百姓もこぞって大開田を進めた。明治新政府も欧米の新技术を導入し大規模な開田を進めた。敗戦で荒廃した国土に六百万人もの海外からの引揚者があり食糧が不足、再び大開田が進められた。

大開田の主役は、戦乱の時代に生れた百姓たちの自治組織「ムラ」。個人の力だけでは、米作りも子孫に残す水田を拓くこともできない。しかも

年貢はムラ全体での連帯責任。厳しい「村掟」のもとで、各自の役割を忠実に果たし相互扶助するムラという「運命共同体」が必要でした。このムラの精神が戦後復興、後にわが国を経済大国に押し上げた原動力だったと思います。

敗戦により民主主義国家となった日本に、自由主義経済とともに欧米型の経営が導入されたが、日本人はその個々の能力・権利を重んじる経営法に馴染めなかった。戦後の混乱期に個人の権利ばかりを主張していたら会社も従業員も生き延びることができない。そこで考え出されたのが「終身雇用制」と「年功序列制」を基本とする「日本型経営」。それは、ムラのかわりに会社を運命共同体と考える経営法でした。

従業員は、運命共同体・会社に忠誠を誓い力を合わせ働いた。経営者は、その働きに報い終身雇用を約束し、年の功に応じて賃金を支払った。ムラでは、歳をとつても体が動く限り年の功に応じた役割があった。この思考法を欧米人はなかなか理解できなかったが日本人は納得した。百年ほど前の明治初期まで国民の八割ほどが百姓、そのころの日本人のほとんどが、親、祖父母の代までたどれば、皆、ムラ出身者だったから。

見えてきた謎の答

ぼんやりとわかってきました。日本人は、懸命に米作りを追い求めてきた。その結果として、今の国土の姿が造りだされ、その営みが今に至る日本人の心を、私が学んだ技術を創りあげたと。そ

の技術は、今では農業集落と呼ばれるムラの絆帯(物と物、人と人とを結びつける役割を果たす大事なもの)を形成する役割を持っていたと。それは、私にとつて、やりがいのある技術・仕事だったと。米が経済の主役の座を降りてから半世紀、経済のグローバル化、高齢化・人口減少、気候変動のためか災害が多発する日本、農業土木の将来はどうなるか。最後に、それを私なりに考えこの本に書いてみました。お読みください。

◎「水田と前方後円墳」を三〇名様にプレゼント致します。ご希望の方は、「水田と前方後円墳」希望として、官製はがきまたはメールにて一五二ページの宛先まで住所、氏名、性別、年齢、職業、勤務先を記入し申し込んで下さい。

PROFILE



田久保晃 (たくぼ・あきら)

1947年、千葉県に生まれる。県立船橋高等学校卒。東京農工大学農学部農業生産工学科(農業土木専攻)卒。

1970年、太陽コンサルタンツ(株)(現NTCコンサルタンツ(株))に最初の新卒社員として入社。その後40年間、全国の農業・農村にかかわるコンサルタント業務に従事。2009年退社後は執筆活動に専念。2018年『水田と前方後円墳』を上梓。

技術士(農業部門 農業土木 1983年登録)、農業農村工学会会員。山崎農業研究所会員。